

コンディヤックの動的人間観 ——欲求の理論とその展開——

飯野和夫

はじめに

人間精神の働きを探究しようとしたところざしたコンディヤックは、第一の体系的著作である『人間知識起源論』（1746）において、人間精神の働きを「知性との関係」において考察した。その後、第二の体系的著作である『感覚論』（1754）においては、人間精神をむしろその原初の働きから解明しようとした。そこでは、人間のいわゆる感覚的・感情的な働きから説き起こされ、それが知性へと発展していく端緒が考察されている。『感覚論』は「立像 statue」の比喻ばかりが有名で、立像の動きのないイメージゆえに、内容の検討がなされる以前から、そこでは過度の抽象や概念操作が行われて現実の生きた人間を映し出していないのではないかと想像されがちである。しかし、実際には、コンディヤックは『感覚論』や、続く『動物論』（1755）などにおいて動的な人間観を提示して、現実の人間に迫ろうとしている。本論文は『感覚論』を主な対象として、コンディヤックがどのように人間をそのありのままの姿で捉えようとしたかを、欲求・欲望の理論を軸に跡づけてみたい。ただし、本論文は、主に扱う『感覚論』にしても、その内容を全面的に論じるものではない。

ジャック・デリダはその著作『たわいなさの考古学』（1973）で独創的なコンディヤック論を展開した。筆者は「デリダのコンディヤック読解——自同性の問題を中心に——」（2009）において、デリダの所論と、筆者なりのコンディヤックの理解とをいわば交差させて論じた⁽¹⁾。本論文が扱う問題もデリダの著作の論点の一部と関連しており、論述の過程で折にふれて注を立ててデリダの所論に言及することにする。

I. 『人間知識起源論』

1. 欲求

コンディヤックの最初の主要著作である『人間知識起源論』（以下『起源論』と略す）（1746）は、人間の魂の働きの内、特に「知性 *entendement*」を、個人におけるその生成発展と人類史の上でのその生成発展に着目しつつ探求した著作である。また、そうした探求をとりわけ人間の言語活動に注目しながら行っている。この著作は次のように「私たち」人間の探究を始めている。

「私たちは決して私たち自身から外に出ることはない。私たちが知覚するものは、私た

ち自身が持つ想念 (*pensée*) 以外のものではない。(・・・) / 生存を始めた時期の一人の人間を考察してみよう。彼の魂はまず、光、色、苦、快、運動、静止といったさまざまな感覚を経験する。これらが、彼が持つ最初の想念である。」(『起源論』 I-I-I-1, 3) ⁽¹⁾

このように人間精神の働きを感覚から説き起こすとはいえ、この著作における探究の主要な対象は知性に限定されている。おそらくはそのため、この著作には「不安 *inquiétude*」「意志 *volonté*」「希望 *espérance*」といった、伝統的な知性概念に収まりきらない概念は現れない。「欲望 *désir*」も、魂の能力の分析とのかかわりではただ一カ所に現れるにすぎない ⁽²⁾。ただし「欲求 *besoin*」は、この著作においても重要概念の一つとして頻出する。原語である *besoin* は、コンディヤックの文章中に現れる場合、総合的に考えて「欲求」と訳すが ⁽³⁾、この語には「必要」「必要性」というニュアンスがあることにあらかじめ注意しておきたい。この語は、『起源論』第I篇第II部第III章第28節で初めて「観念連関」と関連しつつ現れる。

「いくつもの観念 (*idées*) の間に連関が生じる原因は、それらの観念が一緒に現れたときに私たちがそれらに対して払った注意 (*attention*) をおいて他にない。ものごとが私たちの注意を引くのは、ただ私たちの気質、情念、状態、一言で言えば私たちのいろいろな欲求 (*nos besoins*) との関係によってである。よって、結果として、同一の注意が、いろいろな欲求の諸観念と欲求に関係するものごとの諸観念とを同時に包含し、それらの観念を結び付けるのである。」(I-II-III-28) ⁽⁴⁾

「私たちの気質、情念、状態」が「いろいろな欲求 *besoins*」と言い換えられている。ここで *besoins* と複数形に置かれるのは、欲求にいろいろな種類があることを示しているように思われる。常識的には欲求はむしろ、一つ前の引用に現れた「快 *plaisir*」「苦 *douleur*」と関係するのではないかと思われるが、実際には『起源論』中に両者を結びつける記述はさほどない。苦との関係については、「自分のいろいろな欲求のせいで必要 (*nécessaire*) となったものがないために苦しんでいた人」(II-I-I-2) と語られる。快との関係は直接語られないが、「ある欲求には、それを満たすことができるものごとの観念が結びつく」(I-II-III-29) と語られる。この「欲求を満たすことができるものごと」を享受できたとき、そのものが「快」の感覚を生むのではなからうか。結局、自然な欲求が満たされた状態は快を生み、満たされない状態は苦を生むのではなからうか。また、欲求の対象は具体的なものごとであろうが、「私が追い求めた快」(I-II-IX-88) という表現にも現れているように、一般化して考えれば、「快」自体が「追い求める *rechercher*」べき対象、つまりは欲求の対象であると言うこともできよう。

結局、いろいろな欲求は、生きていくためのすべを求める「私たちの気質、情念、状態」のあり方であり、私たち人間の原理的な働きなのではなからうか ⁽⁵⁾。

さて、私たちのあらゆる観念は、いろいろな欲求に関係する諸観念を基礎として成立するとされる。コンディヤックは、続く第 29 節冒頭で語っている。

「私たちのあらゆる欲求は互いに関連しており、これらの欲求についての諸知覚(perceptions)を基礎的諸観念の連なりとして考えることができよう。こうした基礎的諸観念に私たちの知識に属するあらゆるものを関連づけることができよう。／基礎的諸観念のそれぞれの上位には、諸観念の別の連なりが立つことだろう。それらの連なりは種々の鎖を形成するだろうが、それらの鎖の力はおぼろげに、さまざまな記号の類比関係(analogie)から、さまざまな知覚の秩序から、そして、最もかけ離れた諸観念をも状況が時として結びつけることで形成される連関から得られることだろう。」(I-II-III-29)

こうして、記号によって介在される諸観念も、欲求にかかわる諸観念の上に立つとされている。また、状況は具体的な事物の諸観念を結びつけることになるのではなかろうか。結局、欲求は私たちの意識の基層をなしていることになろう。

「私たちが目覚めている限り、私たちの気質、情念、状態は私が基礎的と呼ぶ〔欲求の〕諸知覚の内のいくつかを私たちの内部に絶えず引き起こしている。それゆえ、思い出そうとする観念が、より多くの欲求と、より直接的な仕方につながっているほど、私たちは容易に思い出すことができるのである。」(I-II-III-31)

こうして諸欲求は人間の行動を規定する。人間に原初的に「有用 utile ないし必要 nécessaire」なものだけを求めさせるとともに、人々にまとまるように促して社会の創生の原動力ともなろう。

「社会の創成期には、人々はまだ純粋な娯楽であるものごとくにふけるわけにはいかなかった。いろいろな欲求によって彼らは一つにまとまるよう余儀なくされ、自分たちに有用ないし必要でありそうなものだけに視野を限られてしまっていたのである。」(II-I-VIII-72)⁽⁶⁾

「純粋な娯楽」も欲求の対象となろうが、それは社会が確立し、人々が生き抜くべきを確保できるようになってからのことであろう。

2. 想像、恐れ、記号

知性を扱う『起源論』には、伝統的知性概念に収まりきらない「欲望」「不安」「意志」「希望」などの概念はほとんど現れない。さまざまな感情も分析の対象となることはない。ただし、第 I 篇第 II 部第 IX 章において「想像 imagination」が扱われ、さらにその中で「恐れ」の感情が、本格的な分析の対象とはならないものの言及されることになる⁽⁷⁾。想像は『起源論』では、すでに経験したことのある〈知覚そのものの再現〉であると考えられていた (I-II-II-25)。苦しみの知覚をきっかけに、想像の中で恐れが呼び起こされ、人間とその行動に影響を与えることが指摘される。

「苦しみの知覚は、それと密接に関連するあらゆる観念⁽⁸⁾を私の想像の中で呼び起こす。危険を目にすると恐怖 (frayeur) が私をとらえる。私はその恐怖に打ちのめされ、私の体はほとんど抵抗できない。私の苦しみはどんどん激しくなり、衰弱もひどくなっていく。(・・・) / 私が追い求めた快も、それが結びつくことができるあらゆる好ましい観念を同様に思い起こさせる。想像は受け取った一つの知覚について、いくつもの知覚を感官に送り返すのである。」(I-II-IX-88)

快が「同様に」、つまり想像の中で呼び起こす「あらゆる好ましい観念」の中には、「恐怖／恐れ」と対をなすであろう「希望」の感情も含まれるのではないか。『起源論』におけるコンディヤックは希望について明言しないが、人は希望とともに快への欲求を抱き、恐れと感情とともに苦を回避しようという一種の欲求を抱くであろう。『起源論』においても、快苦、欲求、想像といった魂の基礎的な働きから、感情面を含めた人間の生の実相に迫ろうとする端緒は見てとることができる。⁽⁹⁾

欲求は魂の発展の推進力ではあろうが、『起源論』においては、魂の能力を発展させる手段となるのは記号の発展であると考えられている。その記号が成立するには、前提条件として他者との交流が必要であると考えられた。コンディヤックは、生まれついた聾啞者で、後に聴力を回復した若者を例に引いて指摘している。

「欲求を満たして情念を満足させる必要で、魂のすべての働きを発展させるのに十分ではないのか？ / 私は否と答えよう。なぜなら、この若者が他人との交渉を一切持たずに生きる限り、観念を恣意的な記号と結びつける機会を持たないであろうから。」(I-IV-II-20)

恣意的、制度的な記号は人々の交流、あるいは社会の存在が前提となって発展する。1750年ころの書簡でコンディヤックは『起源論』の内容をふりかえりつつ語っている。「この交流より前には、人々は現前する対象にしか関心を持ちませんでした。なぜなら、もう感じられないであろう欲求のことを考えるとどんなきっかけを彼らは持っていたのでしょうか。(・・・) ですから、交流によって人は、彼に一層強く影響を与える現前する対象だけに関心を持った状態から引き離されるのです。」(クラメール宛の手紙、1750年9月以降執筆⁽¹⁰⁾；『起源論』I-IV-II-25参照)

上に見たように、「基礎的諸観念のそれぞれの上位には、諸観念の別の連なりが立つとされ、そうした「連なり」の「鎖の力」はもっぱら、「さまざまな記号の類比関係 analogie」から、「さまざまな知覚の秩序」から、状況が結びつける観念間の「連関」から得られるとされた。記号の「類比関係」や「意味作用 signification」は、つねに欲求の理論の基礎の上に整理されるのである⁽¹¹⁾。

とはいえ、『起源論』においては、知性以外の感情などの局面での人間精神の働きは系統的に分析されてはいない。知性以外の諸概念は、『感覚論』において再定義あるいは拡充され、相互の関係が整理されることになる。

II. 『感覚論』

『感覚論』（1754）は、『起源論』に続くコンディヤックの体系的哲学著作の第二作である。この著作においてコンディヤックは、人間と同様の潜在能力を備えた立像を想定し、それが嗅覚、聴覚、味覚、視覚、触覚を順次獲得していくと想定する思考実験を行い、それを通して観念の形成を含む魂の諸機能の発展過程を探求した。デイドロはコンディヤックの『起源論』にはパークリー的な唯心論への傾きがあると批判していたが（『盲人についての手紙』1749年）、この批判を意識してコンディヤックは『感覚論』において、新たに触覚を通じた外界認識の問題も論じた。『感覚論』においては、認識における記号あるいは言語の役割は論じられていない。人間精神の働きの内、欲求、欲望、不安、意志、希望、恐れといった伝統的な知性概念には収まらない働きの分析はむしろこの『感覚論』に現れる。

『感覚論』は四部から構成され、各部のタイトルは次のようである。

第一部『それ自体では外部の対象を判断しない感官について』

第二部『触覚、それ自体で外部の対象を判断する唯一の感官について』

第三部『触覚は外部の対象を判断することをどのように他の感官に教えるか』

第四部『すべての感官を享受している一人きりの人間がもつ欲求、才知、観念について』

以下、『感覚論』を中心に、コンディヤックが人間の行動原理とみなしたものを追うことにしよう。人間の魂のさまざまな働きの原型は立像が感覚を持ち始めた段階、つまり第一部においてほとんどが与えられる。その確認から始めたい。

1. 快苦、欲求

コンディヤックは『感覚論』において、人間の原初的能力である感覚の内に人間の諸能力の発展の原理があると考えた。感覚の快苦を通じて対象への関心が生じ、その関心が、広義の感覚能力の内に潜在している諸能力を発展させていくと考える。

「立像〔人間〕の諸能力の発展を引き起こす原理は単純である。いろいろな感覚(sensations) そのものがこの原理を含む。なぜなら、すべての感覚は必然的に快かったり不快だったり(agréables ou désagréables)するので、立像はある感覚を楽しみ、他の感覚を避けることに関心をもつ(être intéressée)からである。ところで、このような関心(intérêt)が知性と意志の働きを引き起こすのに十分であることは納得されよう。判断、反省、欲望、情念などはさまざまに変形された感覚そのものに他ならないのである。」

(Dessin de cet ouvrage) ⁽¹⁾

この箇所からは、人間の諸能力の発展の原理は「ある感覚を楽しみ、他の感覚を避けること」への「関心」であると理解することができる。ただし、関心は、感覚の「快かったり不快だったり」する効果、つまり快と苦を前提としている。実際、快苦こそ立像——すなわち人間——の「いろいろな働きの原理」(I-II-4 見出し)であるとされることもある。

さて、ここで「関心」とされるものは、「欲求」あるいはむしろ後で見る「欲望」と近い概念であろうと思われるが、その欲求の定義には、過去と現在の快苦の比較という条件が持ち込まれる。快と苦が人間の作用の真の原理となりうるのは、過去の快苦が想起されることを必要としている。欲求は『起源論』においてすでに重要概念であったが、コンディヤックは『感覚論』で欲求を次のように分析する。なお、この箇所では「嗅覚の感覚だけに限られた人間」(I-II)が想定されている。

「欲求の起源。心地が悪かったり、さほどよくなかったり (mal ou moins bien) する度に、立像は過去の感覚を思い出して現在の状態と比較し、かつての状態に戻ることが重要だと感じる。ここから欲求 (le besoin) が生じる。あるいは、享受することが必要であると判断されるよいことの認識 (connaissance) が生じる。／したがって、立像が自らの欲求を知るのは、こらえている苦惱 (peine) をかつて享受した快と比較することだけによっているのである。(・・・) このようにして、快と苦がつねに立像の諸能力の活動を引き起こすことになる。」(I-II-25)

ここではいくつかの概念が用いられるが、コンディヤックによれば「比較するとは同時に二つの観念に注意を注ぐことにはかならない」(I-II-14) ⁽²⁾。また、「判断とは比較する二つの観念の間の関係の知覚にはかならない」(I-II-15)。一方、コンディヤックは認識には独自の定義は与えていない。結局、欲求は「よいことの認識」だが、それは、現在と比較して過去の状態あるいはものごとがよりよかったという判断、そして、そのよりよいことを享受することが必要・重要であるという判断を含み持つ。つまり、欲求は判断を潜在的に含む認識である。現状よりよいあり方を教えるのは、過去の思い出である。『起源論』に比べ、欲求に、認識が深く関与する形での定義が与えられていることが見てとれる。なお、欲求という語は、『起源論』において複数形をとったのに対して、『感覚論』では抽象度の高い単数形が使われる。

2. 欲望、不安

欲望は先の引用で「変形された感覚」の一つのあり方とされていた。この欲望は、欲求を前提として次のように定義される。

「私たちが欲求を感じるものごとに魂の諸能力が向かう (se diriger sur) 時、欲望 (le

désir)とはこれらの諸能力の活動そのものに他ならない。(・・・) /よって、あらゆる欲望 (tout désir) の前提は、立像が今の瞬間の自分のあり方よりもよい何らかのものの観念を持つことであり、相次ぐ二つの状態の違いを判断することである。(・・・) 欲望の尺度は二つの状態の間に認められる違いである。」(I-III-1, 2)

欲求と欲望はともに、現状とそれとは別のあり方との「違いの判断」つまりは比較を前提としていることがわかる。欲求と欲望の関係については、欲求は「認識」であるのに対して、欲望は対象へと向かう魂の「活動」そのものであるとまずは言うことができる。

『感覚論』第I部第II章の最初の数節では、比較を知る前の感情のあり方が分析され、その後に欲望の「形成」が論じられる。ここでも「嗅覚だけに限られた人間」としての立像が問題となっている。

「最初の匂いに出会うとき、立像の感じる〔感覚する〕能力はすべて立像の器官の上になされる印象に向かう。これが私が注意と呼ぶものである。」(I-II-1)

コンディヤックは続ける。

「この瞬間から、立像は楽しみ始めるか、苦しみ始める。感覚する能力がすべて快い匂いに向けられていれば楽しみであり、すべて不快な匂いに向けられていれば苦しみだからである。 /しかし、立像は自分が被るかもしれないさまざまな変化についてまだ何の観念も持たない。したがって、心地よければ、さらによくなろうとは望まず、心地が悪くても、よくなろうとは望まない。苦しみは立像にまだ知らないよいことを欲する (désirer) ようにさせず、それは楽しみが、やはり知らない悪いことを恐れさせないのと同様である。(・・・) [この立像の場合] 苦は異なった状態への欲望が生まれる以前にある。そして苦が私たちにこの欲望を引き起こすのは、異なった状態がすでに知られていることによるのみである。(・・・) 立像はまだいかなる変化、継起、持続の観念も持っていない。したがって、欲望を形成することができずに存在している。」(I-II-2,3) ⁽³⁾

続けて欲望の形成が語られる。なお、前節では、快苦を通じて生じる対象への「関心」が人間の精神的諸能力を発展させると考えられていることを見た。次の引用では、快苦を前にしての欲望から魂 (âme) の進歩が跡づけられるとされるが、これも同様の事態を指していよう。

「現在の自らの状態をやめて、かつてあった状態に戻ることができる、と立像が気づくなら、苦の状態を記憶が呼び覚ます快の状態と比較することで、この苦の状態から欲望が生まれることを私たちは目にするだろう。このような仕組みによって、快と苦とは唯一の原理 (l'unique principe) なのであり、立像の魂のあらゆる働きを引き起しつつ、可能なすべての認識へと段階を追って立像を高めるのである。立像がなしうる進歩を見抜くには、その欲するべき快、恐れるべき苦、および状況に応じたそれら相互の影響を観

察すればよかろう。」(I-II-4)

欲望が「活発」か「弱い」かは、比較される「二つの状態の間に認められる違い」が大きいか小さいかに依存するとされる (I-III-2)。また、「他の欲望を持つことを許さない欲望、あるいは少なくとも最も支配的な欲望」は「情念」と呼ばれるとされる (I-III-3)。

よいものへと向かう魂の諸能力のあり方、状態が欲望とされることはすでに見た (本節冒頭を参照)。そのよりよいものが現在欠けているという判断からは、いわば精神的な苦の印象>が生じ、それが不安 (inquiétude) と呼ばれるものなのではなかろうか⁽⁴⁾。この不安は欲望のいわば裏面を成している。

「あらゆる欲望の前提は、立像が今の瞬間の自分のあり方よりもよい何らかのものの観念を持つことであり、相次ぐ二つの状態の違いを判断することである。それらの状態が少ししか違わなければ、立像は、欲するあり方が欠けていてもさほど苦しめない。そして、立像が感じる感情を、私は不快 (mal-aise) あるいは軽い不満と呼ぶ。違いがかなり大きければ、立像は逆により多く苦しむ。そして、立像の感じる印象を、私は不安、あるいは苦悶 (tourment) と呼ぶ。そのとき、立像の魂の活動、つまり立像の欲望は一層強い。(・・・) /たとえば、欲望が最も激しいのは、その善が現在の状態と一層異なっているだけに、その欠如が一層大きな不安を生む、そうした善へと立像の諸能力が向かっているときである。」(I-III-2, 3)

「私たちが見たとおり、欲望は、ある快樂の欠如が生み出す不安によって刺激された諸機能の活動の中にある。」(III-IX-5)

コンディヤックは厳密な学術的言語の創設を主張した。にもかかわらず、コンディヤック自身の「不安」という語の使用法はやや厳密さに欠けるところがある。不安は時として、精神的な不快が強度を増して苦に至る、その中間段階のようにも語られる。

「欲するものを手に入れるために、立像がいくたの障害を乗り越えなければならないと想定しよう。すると欲求は鎮まるまで長時間続くことになる。不快 (mal-aise) は源では弱かったのに、知らず知らずに強くなる。それは不安に変わり、時として苦しみ (douleur) に至る。」(IV-I-3)

3. 愛、憎悪、希望、恐れ、意志

欲望との関係で魂の多くの働きが定義される。「愛」と「憎悪」は欲望と直接の関係を有していよう。

「愛すること (aimer) はいつも楽しむこと (jouir) あるいは欲する〔欲望する〕こと (désirer) の同義語である。憎むこと (hair) はある対象を前にして不快 (mal-aise) ・不

満 (mécontentement) に苦しむことの同義語である。」(I-III-5)

愛は快を享受すること、あるいは快いあり方に対して欲望を発動させることだとされる。愛はその一つのあり方として欲望を含んでいることになる。憎悪は苦しむことであり、ここでは明言されないが、対象を回避しようとする一種の欲望も作動するのではなからうか。愛と憎悪は「情念」の内に数えられる (I-III-6) ⁽⁵⁾。

次に希望と恐れを見よう。

「快かったり不快だったりする感覚を感じる習慣から、立像はそれらをまた感じるができるかと判断する。この判断は、気に入る感覚への愛に付け加わると希望を生み出す。気に入らない感覚への憎悪に加わると恐れを形作る。実際、希望することは、良いことを享受できると期待することである。恐れることは悪いことに脅かされていると考えることである。希望と恐れは欲望を増大させるのに与っていることが見てとれる。この二つの感情の戦いから、最も激しい情念が生まれる。」(I-III-8)

愛と希望との差は未来の可能性への判断が介在するかどうかである。これらいわば肯定的な諸概念に、否定的な諸概念が対応する。憎悪に未来の可能性への判断が介在すると恐れが生まれる。未来への判断を含む希望や恐れは、よいあり方に対する欲望を（また明言はされないが、より悪いあり方に対する回避の欲望をも）増大させるだろう。『起源論』では、恐れは——そしてたぶん希望も——<知覚そのものの再現>としての想像との関係で考えられていた（本論 I-2 参照）。『感覚論』では、快・不快が現実化するかどうかの判断の介在へと分析の視角が変化している。

ところで、希望、恐れなどの概念や術語が厳密に使い分けられているとは言えない。本来なら希望と恐れが対応するが、今見たように、欲望を一つのあり方として含む愛と希望との差はわずかである。そのためか、欲望と恐れが無造作に対応させられる箇所もある。

「立像に自分の変様に関するいかなる思い出も残っていなければ、(・・・) 立像は楽しんで苦しんだりするであろうが、いまだ欲望も恐れも持たないであろう。」(I-II-5)

こうした希望や恐れへの分析は、立像（人間）が嗅覚だけを持つと仮定された段階で置かれている。コンディヤックにとって、「快への希望」と「苦への恐れ」は、共に人間にとって本源的な感情なのである ⁽⁶⁾。

欲望を一つのあり方として含む愛を基として成立する希望は「意志 *volonté*」へとつながっていく。『感覚論』では、意志は次のように定義される。

「意志という言葉によっては、絶対的な欲望、つまり欲するものが私たちの力の及ぶ範囲にあると考えられるような欲望が意味される。」(I-III-9)

これだけでは意味がとりにくい。そこで、同じ内容をよりわかりやすく語っていると思

われる、『教程』（1775）所収の『予備講義の概要』を見てみよう。

「欠けているものごとへの欲望に、私はそれを獲得できるだろうという判断を加えると、希望が生まれる。（・・・）／私はそれを獲得できるだろうというこの判断に、私は障害に出会わないはずだ、何も私にあらがえないという判断を置き換えれば、欲望は意志と呼ばれるものになる。」（OP, t.I, p.414 [『予備講義の概要』第II節、「欲望」の項]）⁽⁷⁾

意志は『感覚論』、『予備講義の概要』のどちらにおいても、＜欲望を自らの力で確実に成就できるという判断が欲望に加わったもの＞である。欲望と意志は、一般的に見れば、＜人間の心身の諸能力が発動されるあり方＞を示す概念であるとも言える⁽⁸⁾。

4. 思考の鍛練、実践的知識、制度的記号

人間は、快と苦を原理とし、希望と恐れを実際のな手がかりとして、自己保存のための行動様式を鍛えていくことになる。立像（人間）が「すべての感官（sens）」を獲得した段階を想定してコンディヤックはあらためて語っている。

「恐れがすでに苦しんだ痛み（mal）に似た痛みを示して立像を脅かすのに対して、希望はそうした痛みに予め備え、または対処するようにおだてる。（・・・）危険が繰り返され、避けるのに難易があるのに応じて、立像は代わる代わる〔恐れと希望の〕一方から他方へと移る。（・・・）立像が自己保存に必要な策をより巧みに取れるようにする役割を持ったこれらの情念は、立像が幸福にも不幸にもなりすぎないように気を配っているように見える。」（IV-I-5）

快苦に基づいて行動を導く希望と恐れは、行動する人間に常に現れる心象である。それらは人間に極めて親しい心象なので、實際上、人間はもはやそれらなしでは生きることができないほどである。

「私が自分のあり方を比較すればするほど、その楽しみ（jouissance）や苦しみ（souffrance）が私に感じやすくなる。快と苦が私の注意を競って引きつけ続ける。快と苦が私のあらゆる能力を発展させる。私が習慣を身につけるのももっぱら私が快苦に従うからであり、私はもはや、ただ欲する（désirer）か恐れる（craindre）かするためにのみ生きる。」（IV-VIII-1）

さて、不安は、よりよいものが欠けているという判断から生じる、いわば＜精神的な苦の印象＞なのではないかと先に述べた（II-2 参照）。その際、＜よりよいもの＞自体が、認識欲が満足させられた状態、言い換えれば＜精神的・知的な快＞である場合も考えられよう。こうした場合、認識できない状態からは不安が生じ、その不安は人を認識へと駆り立てる。立像が嗅覚、聴覚、味覚、視覚に加えて、触覚を獲得した段階で、コ

ンディヤックは次のように語っている。

「自分が固さのある何ものであることを知った時、思うに、立像は自分が触れるすべてのものの中に自分を見つけられないで驚く。(・・・) / この驚きから、どこに自分があるか、そして言ってみればどこまで自分があるかを知りたいという不安が生まれる。」(II-V-7, 8)

「好奇心からか不安からか、立像は目の前に手を持ってゆく。手を遠ざけ、近づける。すると見ている面は、明るくなるか暗くなる。直ちに自分の手の運動がこれらの変化の原因であると判断する。」(III-III-7, 8)⁽⁹⁾

こうして、<精神的・知的な快・不快>にかかわる欲求・欲望も問題としうるところまでコンディヤックは到達しているように思われる。

『感覚論』についてここまでに見た範囲では、立像(人間)の魂は、記号——とりわけ制度的記号——を使わずに思考能力を発展させている。こうして得られる知識(認識)は「実践的知識」とも言うべきものである。

「理論の知識(*connaissances de théorie*)と実践的知識(*connaissances pratiques*)とを区別しなければならない。ところで、私たちが言語を必要とするのは前者についてである。なぜなら、理論の知識は判明な観念の連なりに存するからであり、よって、こうした観念を秩序立てて分類し、限定するために記号が必要だったからである。／逆に、実践的知識は混雑した諸観念(*idées confuses*)⁽¹⁰⁾であり、これら諸観念は私たちの行為を統御しているが、私たちはこれら諸観念がどのように私たちを行動させるのか気づくことはできないのである。」(第IV部導入部)⁽¹¹⁾

記号は観念を限定し、判明な観念の連なりを形成するのに必須である。しかし、実は、記号が働くより前に、すでに混雑した諸観念が「私たちを行動させ」ている。記号が使われる以前に、人はいわば感覚の領域において判断しているのである。だが、それは混雑した仕方によってであり、私たちはそれを自覚してはいない。厳密な知識、理論の知識を獲得するためには、記号、それも制度的記号が必要になる。この理論的なものは、いわば実践的なものを受け継ぎ発展させるものなのではなかろうか⁽¹²⁾。

III. 欲求の理論の展開

1. 欲求と欲望——『予備講義の概要』

ここで欲求と欲望の関係を考えておきたい。そのためには、すでにふれた『教程』所収の『予備講義の概要』(1775)に注目するのがよかろう。この著作の第II節「魂のさまざまな働きについて」では、魂の働きが十に分類され、それぞれにあらためて定義が与えられている。すなわち、注意、比較、判断、反省、想像、推論、知性、欲望、意志

(能力と考えられたそれ)、考える能力、であるが、これらの働きに関連する諸問題についてここで検討を加えることはできない⁽¹⁾。ただ、「知性 *entendement*」は意味内容が広く感じられるが、『感覚論』では特に定義を与えられていない。この働きは、注意、比較、判断、反省、想像、推論という「すべての働きを含み、それらの結果でしかない」(OP, t.I, p.414 [『予備講義の概要』第Ⅱ節、「知性」の項])とされている。「知性は注意から生まれるあらゆる働きを含む能力」であるともされる(同所、「意志(能力と考えられた)」の項)。

さて、欲望の定義は知性の定義と「能力と考えられた意志」の定義のあいだに置かれている。その定義は欲求から説き起こす。

「必要であると判断されるものが欠けていると、あなたの内に不快 (*mal-aise*) あるいは不安 (*inquiétude*)⁽²⁾ が生み出され、その結果、あなたは程度の差はあれ苦しむことになる。これが欲求と呼ばれるものである。／不快はあなたの目、触覚、そしてすべての感官を、欠けている対象へと方向づける。さらに不快はあなたの魂を方向づけて、この対象について持っているあらゆる観念や、この対象から受け取るだろう快にかかわらせる。したがって、不快は身体と魂のすべての能力の働き (*action*) を方向づけるのである。／欠けている対象に向けて諸能力をこのように方向づけること (*détermination*) が欲望と呼ばれるものである。したがって欲望は、対象が眼前になれば、魂の諸能力の方向づけ (*direction*) でしかない。さらに欲望は、対象が眼前にあれば、身体の諸能力の方向づけも含むのである。」(OP, t.I, p.414 [『予備講義の概要』第Ⅱ節、「欲望」の項])
ここで欲求は、現に欠けている<必要なものの認識>であることよりも、むしろそうした認識にともなう不快・不安・苦といった感情の面が前面に出ている。一方、欲望については、『感覚論』において<欲求の対象に向かう魂の諸能力の活動>とされていたのに対して、ここでは<欲求の対象への魂の諸能力の方向づけ>とされている。<対象に向かう活動>から<方向づけ *détermination, direction*>へと微妙に定義の重心が移動しているが、魂の諸能力に共通する<活動のあり方>が問題となっているとは言えよう⁽³⁾⁽⁴⁾。

欲求はコンディヤックの体系のかなめであるように思われる。本論文 II-1 で見たように、快苦も比較されて、欲求が生じて初めて人間の作用の「原理」とであると言いうるのだと思われる。そして、この欲求は具体的な欲望の形をとって複雑化していく。直前の引用中にあるように、「不快はあなたの魂を方向づけて、この対象について持っているあらゆる観念(・・・)にかかわらせる」のだが、この方向づけが欲望であるから、欲望はあらゆる観念、あらゆる知識——理論的あるいは実践的な知識——の源にあると言える。

「注意」に着目しても同様のことが言えよう。「感官 *sens*」あるいは「器官 *organes*」

の方向づけも欲望の働きだが、それは注意へと行き着く。

「諸器官 (organes) の方向づけが、同時にあなたに生じるいくつもの感覚の内の一つにあなたが着目するようにさせて、あなたがもう他の感覚を気にしなくなる時、この一つの感覚が、私たちが注意と呼ぶものになる。(・・・) 現前する対象に向けられた注意が、対象があなたに生み出す一層特別な感覚にすぎないのと同様に、不在の対象に向けられた注意は、その対象がもたらした感覚の思い出でしかない。」(OP, t.I, p.412 [『予備講義の概要』第II節、「注意」の項])

コンディヤックにおける「注意」の概念は「着目された感覚」といった意味合いである。欲求、そしてそれに基づく欲望は、こうした注意一般の源にあることになろう⁽⁵⁾。一方、本節冒頭で見たように、「知性は、注意から生まれるあらゆる働きを包含する能力」とされるので、注意は知性の根本にもあることになる。結局、欲望は注意を介して、知性を、さらには対象への理論的關係をも生み出すことになろう。

2. 動的人間観へ

『感覚論』の構成は第II節の冒頭で見た。その第四部『すべての感官を享受している一人きりの人間がもつ欲求、才知、観念について』において、コンディヤックは人間の実際のあり方に一層接近して考察を展開する。その第一章「この人間は自分の諸欲求を選択して満たすことをどのように覚えるか」においては、コンディヤックは議論を食の欲求に限定しながらも、確かな観察眼で人間の活動のあり方を跡づける。なお、本節と次節では『感覚論』と翌年に出版された『動物論』を検討の対象とするが、そこでの「欲望」の概念は、前節で見た微妙な変更を被る前の段階にあると考えておきたい。

コンディヤックは、人間が快に差異を見出し、それに伴って欲求にも差異が生じることから人間の欲求・欲望の分析に踏み込んでいく。

「立像のなかに二つの欲求があり、一つは食物の欠如によって、他は好むに値する味の欠如によって起きる。(・・・) /ところが立像の味覚はある果物に対して飽きてくる。(・・・) 立像は、前に味わったように味わいたいと相変わらず希望しながら、その果物を摂取する。その果物にひどく慣れてしまっているので、自分ではもう感じることのできない快を、また見つけられるとなおも想像することになる。そして、こうした考えが欲望を維持するのに役立つ。/希望はかなわないので、欲望は激しくなるばかりである。(・・・) こうして、立像が陥る行き過ぎの理由は、多くの場合ついた習慣であり、また、想像が絶えず描き直してみせるが、しかもいつも逃れてゆく快の幻影なのである。」(『感覚論』IV-I-9, 10) (強調引用者)⁽⁶⁾

「想像」は『感覚論』では、<欲求によって活発にされた記憶作用>といった意味で使われる (I-II-27~29)⁽⁷⁾。感覚能力が感性的印象へと向かう作用である注意が過去の印

象（観念）を維持し、記憶を形成するが（I-II-6）、この記憶が欲求によって活発化されて想像が派生する。個別の快への欲求によって、過去の快は想像の中で生き生きと描き出される。人はこうして切実な欲求（この場合は食欲）の充足とは別に、個別の快、いつも逃れてゆく快を一層激しく追求し続けることになる。

しかし、こうした＜快の幻影の行き過ぎた追求＞は自然に反しているがゆえにうまくいかないだろう。コンディヤックは続ける。

「立像はそうすることによって罰を受ける。苦がほどなく警告となって示すことになるが、快の目的は立像をただ差し当たり幸福にすることではなく、さらに立像の保存に寄与することなのである。あるいはむしろ、立像がその諸能力を再び使えるよう立像の力を立て直すことなのである。立像は自己の保存のことなど知らないのだから。（・・・）／こうした警告が繰り返されると、立像は自分の欲望を制御すべきであるとともに学ばずにはいられない。」（IV-I-11, 12）

こうして、快にこだわっても快は得られるとは限らず、むしろそのことが苦を招き、その苦が警告となるとされる。ここにはコンディヤックの目的論的思想が表明されている。快と苦は、立像（人間）を保存し、その諸能力を十全に発展させるために、またそのことを人間自らの手で実現させるために、自然があらかじめ用意した手段なのである。そこからの逸脱は苦を招き、それは自然が発する警告なのである。

さて、自然による警告が発せられると、人は欲望を制御しなければならないと知らされた。そうした場面での人間についてコンディヤックは続けている。

「そうすると、立像がこのような欲望を経験すると、想像はすぐに立像がこれまで苦しんだ痛み（mal）をみな描き直さずにはおかないだろう。この〔かつての痛みの〕眺めは立像に、一層気に入る諸対象まで恐れさせ、立像は争い合う二つの不安（inquiétude）の間に置かれる。」（IV-I-12）（強調引用者）

それまで苦しんだ痛みが思い起こされて感じる「二つの不安」についてここで十分な説明はなされない⁽⁸⁾。これについては少し先であらためて考えよう。今の引用にすぐ続けてコンディヤックは次のように語っている。ここでは個別の快が手に入らない場合にかかわる「恐れ」、「嫌悪」が語られる。

「苦の観念がよみがえる際に激しさを伴わなければ、恐れは弱く、わずかな抵抗しかないだろう。苦の観念が激しければ、恐れは強く、より長くそのままであるだろう。ついには、この〔苦の〕観念は、まったく欲望を消し去り、かつて熱心に望まれた対象に対する嫌悪を吹き込むまでになるだろう。／こうして、一層好きな果物を選ぶのに快と危険を全く同時に思い描くことで、立像はより念入りに選択をして食物をとることを学ぶだろう。」（IV-I-12）（強調引用者）

「一層気に入る諸対象」、「かつて熱心に望まれた対象」、具体的には「一層好きな果物」

が招くであろう「苦」の観念が原因となって、人はその対象への個別の「欲望を消し去る」ことがある。それは欲望に流されずに「念入りに選択」をするということでもある。

さて、すぐ続けてコンディヤックは再び不安に言及するのだが、これは先の「二つの不安」に対応しているのではなからうか。

「こうして、また、自分のいろいろな欲望を満たすのに次々と障害を見出すことで、立像はより大きな諸欲求 (besoins) にさらされるようになるだろう。というのは、食物への欲求が引き起こした不安を癒すだけでは充分ではなく、何かしらの快が欠けていることが生む不安をもしずめなければならないからである。そして危険なしにそれをしなければならぬからである。」(IV-I-12) (強調引用者)

「食物への欲求〔つまり食欲〕が引き起こした不安」は比較的たやすく癒すことができるかもしれない。他方、「一層気に入る諸対象」に対する「いろいろな欲望」があり、それらを満たすには「次々と障害」が現れるのが常であり、それらがすべて満たされることはありえない。個別の快を求める心、「何かしらの快が欠けていることが生む不安」ははずまることはない。結局、人は「より大きな諸欲求」に捉えられていくことになるのである。先に見た「二つの不安」とは、1. 自然な快が欠如していることに起因する不安 (切実な欲求に基づく不安) と、2. 個別の快が満たされていないことによる不安 (結果への恐れを伴う個別の不安) なのではなからうか。

私たちはもはや欲望から、それにまつわる不安から解放されることはない。コンディヤックは不安定で動的な人間観へと到達する。しかし、他方で、私たちはこの状況を介して「念入りの選択」、さらには「対象」の「学習 études」(IV-I-7) という高度な判断の領域へと踏み込んでいくのである。

3. 『動物論』における動的人間観

『感覚論』の今見たくぐりでは、食欲のような身体的欲求のほかにも、個別の感覚——「一層気に入る」、「一層好きな」、「好むに値する」、「熱心に望まれ」る感覚——への欲望が問題になっていた。この欲望の場合、「念入りの選択」という上位の精神作用がかかわる可能性が開かれるのであった。また、『感覚論』では別に、<精神的・知的な快・不快>にかかわる欲求・欲望も問題になるところまで来ていた (II-4 参照)。

『感覚論』に続いて出版された『動物論』(1755)の以下に見るくぐりでは、<精神的・知的な快・不快>にかかわる欲求・欲望がはっきり問題にされ、動的な人間観がさらに展開される。なお、ここでの人間はすでに知性を高度に発展させたものと想定されている。

「私たち〔人間〕がもつ〔快を求め苦を退ける〕自己愛 (amour-propre) は有徳 (vertueux) であつたり、不徳 (vieux) であつたりする。なぜなら、私たちは義務を認識したり、

自然法の諸原理にまで遡ったりすることができるからである。(・・・) /このただ一つの違いから、獣では思いもかけないような快と苦が私たちには生じる。なぜなら、有徳な心性 (inclinations) は快い感情 (sentiments) の源であり、不徳の心性は不快な感情の源だからである。」(第Ⅱ部第Ⅷ章 : OP, t.I, p.372 [邦訳、142頁])⁽⁹⁾

ここに現れる有徳、不徳といった道德上のあり方は、『感覚論』においても、知性を扱う『起源論』においても考察の対象とはなっていない。しかし、これらのあり方は「自然法」や「義務」の認識を前提とする知的なあり方である。こうした知的な有徳・不徳のあり方から快と不快の感情が生じるとすることで、コンディヤックはここで<精神的・知的な快・不快>が存在することを明言していることになる。

コンディヤックは続ける。

「これらの〔精神的な快・不快の〕感情はしばしば繰り返される。というのも、社会の本性からして、人生において、何らかの有徳あるいは不徳の行為をする機会がないような時はほとんどないからである。こうして、これらの感情は魂に、あらゆるものによって魂が投げ入れられる活動、私たちがやがて必要とする活動、を生じさせることになる。」(ibid.)

この活動とは、前後の文脈から「欲望」であることがわかる。コンディヤックは続ける。「したがって、私たちのあらゆる欲望を満たすことはもはやできない。それどころではない。これらの欲望が向かうすべての対象を享受することが私たちに許されたとしたら、私たちはあらゆる欲求のうち最も差し迫ったもの、つまり欲望することへの欲求を満足させられなくなってしまうことだろう。私たちの魂に必要なものとなったこの〔欲望する〕活動が魂から取り上げられてしまうことだろう。」(ibid.) (強調引用者)

人間が知ることになった精神的な快・不快の感情は社会の中で絶えず繰り返される。それに対応して人間は新しい種類の欲望、知的な欲望を絶えず生じさせる。そして、人間はついにはこの種の知的な欲望を「必要なもの」とし、「欲望することへの欲求」を抱くに至ると考えられている。この「欲望することへの欲求」は人間においてのみ獲得される地平に属している⁽¹⁰⁾。

この新たな知的な欲望がすべて満たされて取り上げられてしまったらどうなるか。上の引用から続けて引用し直しておこう。

「これらの欲望が向かうすべての対象を享受することが私たちに許されたとしたら、私たちはあらゆる欲求のうち最も差し迫ったもの、つまり欲望することへの欲求を満足させられなくなってしまうことだろう。私たちの魂に必要なものとなったこの〔欲望する〕活動が魂から取り上げられてしまうことだろう。私たちには押しつぶされそうな空虚しか、すべてに対する、また私たち自身に対する倦怠しか残らないことだろう。」(ibid.)

実際には知的な欲望は増殖することをやめない。コンディヤックはさらに続ける。

「そういうわけで、欲望することは私たちのあらゆる欲求の中で最も差し迫ったものである。したがって、一つの欲望が満たされるやいなや私たちは他の欲望を作り上げる。しばしば私たちは同時にいくつもの欲望に従う。あるいは、それができない場合には、現在の状況のせいで魂を向けることができない欲望を他の時期に繰り延べるのである。したがって、私たちの情熱は新しくなり、続いて起こり、数を増してゆく。私たちはもはや欲望するためにだけ、欲望する限りでだけ生きるのである。」(ibid. [邦訳、143頁])
 こうしてコンディヤックは欲望すること自体を楽しむ人間という、極めて動的な人間観に到達するのである⁽¹¹⁾⁽¹²⁾。

むすび

以上、本論文では、人間のもつ欲求や欲望、あるいはいわゆる感覚的・感情的な働きについてのコンディヤックの議論を『感覚論』を中心に跡づけた。その結果見えてきたことは、『感覚論』の一見静止的、幾何学的な印象とほうらはらに、コンディヤックが人間の実相に迫ろうと苦心し、実際に人間精神の動的な姿を照らし出すに至ったことである。人間の生の実相に接近する『感覚論』第四部に、また、そこへと向かう『感覚論』全編の推論に、さらには『動物論』における人間の考察に、私たちは、ロマン主義的哲学以前の、いわゆる「古典主義時代」の人間観察の到達点を見ることができる。十八世紀中葉のこの時期に、文学的方法によらず、哲学的方法を用いて人間精神のダイナミックなあり方を描き出しえたことは特筆に値しよう。

本論文では対象としなかったが、コンディヤックは、人間精神の知性的側面の探究、たとえば記号の作用の分析や記号の逸脱の指摘などにおいても時代に先んじた鋭い分析を示している。こうした欲求・感情の面と知性の面の双方にわたるコンディヤック思想の先進性にいち早く光を当てたのはデリダの炯眼であった。筆者は先に、人間の知性的側面についてのコンディヤックの思想と、それについてのデリダの解釈を照合しつつ検討した(論文「デリダのコンディヤック読解——自同性の問題を中心に——」)。本論文では、人間の欲求や感情の面についてコンディヤックの思想を筆者なりに跡づけることに主眼を置いたが、併せて、注においてデリダの解釈との関連を示した。コンディヤックの思想とあらためて対照することで、欲求論、感情論の場面でもデリダの解釈の的確さと、その先の独創性が確認できるのである。

注

* 本文および注での引用中、(・・・)は中略、[]は筆者による補足、/は原文での改行を示す。

本論文で中心的に論じられる『人間知識起源論』と『感覚論』からの引用の仕方については注を立てて示す。これ以外の著作からの引用は Condillac, *Oeuvres philosophiques, Corpus général des philosophes français*, éd. G. Le Roy, P.U.F., 1948, t.I-III. (ルロワ編『コンディヤック哲学著作集』全3巻)を用い、OPの略号の後に巻、頁を示す。

参考文献欄に掲げたコンディヤックの三著作の邦訳は適宜参照したが、解釈、訳語、文体の違いから、筆者が訳し直した。

はじめに

(1) ジャック・デリダ『たわいなさの考古学——コンディヤックを読む』、飯野和夫訳、人文書院、2006年7月、200頁(本文135頁)。飯野和夫「デリダのコンディヤック読解——自同性の問題を中心に——」、名古屋大学大学院国際言語文化研究科『言語文化論集』第XXX巻第2号、2009年3月、21-52頁。

I. 『人間知識起源論』

(1) 以下、本節(第I節)の引用は特に指定のない限りすべて『人間知識起源論』からの引用である。『人間知識起源論』への参照は、ローマ数字によって順に *partie* (篇)、*section* (部)、*chapitre* (章)を示し、次にアラビア数字によってパラグラフを示して、I-II-III-4のように表示する。岩波文庫の邦訳(『人間認識起源論』)では、同じ区分を順に部、章、節と訳しているので注意されたい。

(2) 『起源論』で、「欲望」が魂の能力の分析との関係で言及されるのは次の箇所である。「何に注意を向けるか自分では制御できない状態にある限り、(・・・)魂は自分をとりまくあらゆるものに従属している。(・・・)しかし、魂が自らの注意〔という働き〕の主人となり、自らの欲望に従ってこの注意を誘導できるようになれば、そのとき魂は自分自身を意のままにし、自分だけに由来する観念を引き出し、自分だけの貯えによって自らを豊かにできるようにする」(I-II-V-51)。「注意」の発動は、実は次の引用に見るように、私たちの「気質、情念、状態」ないし「欲求」と、ものごととの関係に依存している。これは、「何に注意を向けるか自分では制御できない状態」に相当するだろう。この状態から人間が「自らの欲望に従って」注意を誘導できる「注意の主人」となりうるのは、コンディヤックによれば、人間が制度的記号を使って観念をあやつることで、知性の領域を切り開くことによってである。しかし、この点の考察は機会を改めたい。なお、注意は次のように定義される。「私たちの意識のある知覚に対して非常に強く集中させ、その結果、その知覚だけが自分の意識した唯一のものであったと思込ませるような、そういう働きを私は『注意』と名づける」(I-II-I-5)。

(3) コンディヤックにおける *besoin* をいう術語を「欲求」と訳すことを支持する根拠は『感覚論』に至ってはっきりしてくる。たとえば、本論文 II-1 で引用する『感覚論』中の一節では、“*besoin*”は、現在と比較して過去の状態あるいはものごとがよりよかったという判断や、よりよいことを享受することが必要であるという判断を含む「よいことの認識」である。これは単なる「必要(性)」を超えた、精神の作用であると考えられる。

(4) さまざまな観念が連関して現れることが私たちの知識の実質を形成していようが、この連関を形成するのは「注意」の働きであるとされる。注 I(2) で見たように、この注意の発動は初めは私たちの欲求などものごととの関係に依存している (I-II-I-14 も参照)。知識の形成に欲求が重要な役割を果たすという視点は、『論理学』(1780)でも維持される(同書 I-I-IV, 『起源論』古茂田訳上巻

訳注 44 参照)。

(5) デリダはそのコンディヤック論『たわいなさの考古学』で、コンディヤックにおいて欲求は「ものごとに対する私たち〔人間〕の関係のただ一つの原理」と見なしている(邦訳 p.78)。

(6) デリダは、コンディヤックの「欲求の哲学」が「有用なものと無価値なもの」のあいだでの選択を迫っているとしている(上掲書 p.112)。

(7) コンディヤックにおいては、「恐れ／恐怖」に相当する観念を表す名詞としては *crainte* と *frayeur* が用いられ、広く使われる *peur* という語は用いられていない。本論文では、*crainte* に「恐れ」、*frayeur* に「恐怖」を当てる。なお、*crainte* という語は、一般におけると同様コンディヤックにおいても、意味の強弱のニュアンスを有する。自分に危害が及ぶかもしれないという判断から生まれる、強い「恐れ」の感情と、一般に好ましくない結果が生じるかもしれないという判断から生まれる、弱い「恐れ」の感情——日本語で「不安」とも呼びうる感情——である。弱い「恐れ」の感情は『人間知識起源論』 I-V-10 (人々のあいだでの考え方の混乱にたいする哲学者の恐れ)、II-I-XV-153 (ラシーヌの表現する愛の恐れ)、II-I-XV-154 (無知だと思われないかという哲学者の恐れ) などに現れている。

(8) コンディヤックは「知覚」や「観念」という語を広い意味で使っている。『起源論』において、知覚は、感覚対象の知覚であるとともに、本文の引用にあるように苦しみのような感情の知覚でもありうる。また、『感覚論』では、「二つの観念のあいだの関係の知覚」(I-II-15) などとも使われる。一方、観念については、『起源論』で、「外界の対象が私たちに作用するにつれて、私たちは感官を介してさまざまな観念を受け取り、感覚が魂の中に引き起こす働きについて私たちが反省するにつれて、外界の事物からは受け取ることでできなかったあらゆる観念を獲得する」(I-I-I-4) などと語られる。あるいは、『感覚論』では、たとえば色、音、味、広がりや形、外界の何か、の観念について語られる (I-I-1)。

(9) 他に恐れは記号と関係してたびたび言及される。恐れはまず、原初的な「自然的記号」としての叫びが表示する対象である (I-II-IV-40, ほかに II-I-II-13, II-I-VIII-66 も参照)。恐れはまた、叫びという「自然的記号」が原初的な「制度的記号」(身ぶり言語、初期の分節音言語)へと移行していく契機であり、また、そうした移行期の記号が表示する対象の一つでもある。ノアの大洪水の後「どんな記号の使い方も知る前に」砂漠の中をさまよう二人の子供は、たとえば恐怖をきっかけとして、助けを求め、助けを与えようとして、「恐怖の記号である叫びあるいは動作」で話し始めたとされている (II-I-I-2, 3)。さらに、人間において「単語」、つまり本来の制度的記号が案出される過程を分析する際に、事物を名づける(単語を案出する)ようになる強い動機として、苦や恐れが引かれる (II-I-IX-81)。このように、恐れは私たちに最も強い印象を与えるものとして、記号とそれを用いる言語活動が生まれ発展していく重要な契機であると考えられている。なお、次の拙論も参照のこと。「ホプズ、ルソーの社会思想にみる恐怖」(名古屋大学大学院国際言語文化研究科『言語文化研究叢書 6 恐怖を読み解く』所収、2007年3月)。

(10) Georges Le Roy (éd.), *Condillac Lettres inédites à Gabriel Cramer*, PUF, Paris, 1953, p.84-85. クラメール Cramer, Gabriel (1704-1752) はジュネーヴの幾何学者、哲学者。

(11) デリダの前掲書 p.78, 79, 80 を参照のこと。

II. 『感覚論』

(1) 以下、本節(第II節)の引用は特に指定のない限りすべて『感覚論』からの引用である。『感

覚論』への参照は、ローマ数字によって順に *partie* (部)、*chapitre* (章) を示し、次にアラビア数字によってパラグラフを示して I-II-3 のように表示する。

(2) ここで「観念」は感覚の観念も含む。「注意」はその基本形においては「器官の上に作られる印象へと感覚する〔感じる〕能力がすべて向かう」ことであり (I-II-1)、いわば「受動的注意」(I-II-14) だが、その受動的注意は過去の印象(観念)を維持し、記憶(*mémoire*)を形成する(I-II-6)。記憶においては、魂の側からの内発的な注意、いわば「能動的注意」が発動する。比較における注意はこの能動的注意である (I-II-14)。ここには現れないが、「反省」は基本的には、触覚とともに可能となる「注意」の特殊形である (II-VIII-14 参照)。

(3) ここで見たコンディヤックの議論を、デリダは「前=時間的な感情の仮説 *la fiction d'un affect pré-temporel*」と呼んでいる。デリダによれば「前=時間的な感情の仮説において、欲望は石のようなままである」(前掲書 p.131-132)。

(4) 不安 (*inquiétude*) は『起源論』には術語として全く現れず、『感覚論』において初めて現れるようになる。

(5) 『起源論』では「愛する」「憎む」「愛」「憎悪」といった概念がそれ自体分析の対象になることはない。なお、観念の連関について、それがしばしば「愛」や「憎悪」を強めるように働くと言及される (I-II-IX-80)。

(6) 「希望」という術語は『起源論』には現れない。「恐れ *crainte*」は、すでに本文 I-2 でふれたように、本格的な分析の対象とはならないが、さまざまな場面でふれられる。

(7) 『パルマ公の教育のための教程 *Cours d'études pour l'instruction du Prince de Parme*』。1775 年刊。八つ折り版全 16 巻。コンディヤックは 1758 年から 1767 年にかけてパルマ公国の王子フェルディナンドの家庭教師を努め、その経験をこの『教程』としてまとめた。その第一巻は『文法』であるが、その冒頭に『予備講義の概要 *Précis des leçons préliminaires*』などの小品が置かれた。

(8) 「意志」について、『起源論』では第一篇第二部の冒頭で次のように言及される。「魂の働きは、それらを特に知性 *entendement* に関係づけるか意志 *volonté* に関係づけるかに応じて、二つの種類に区別することができる。本書の題名からもお分かりのように、私はそれらの働きを知性との関係に限って考察するつもりである」(I-II 冒頭)。このように「意志」は、魂の働きを大きく二つに区別する際の一方の指標とされる。にもかかわらず、『起源論』が分析対象を知性に限定しているためか、「意志」はこの箇所以外では基本的に言及されず、これ以上の説明が加えられることもない(「意図的に *volontairement*」という表現は I-II-IX-76, 77 に現れる)。しかし、私たちは、『予備講義の概要』第 II 節の「能力として考えられた意志」の項で、この知性と意志の二分法に再び出会うことになる。コンディヤックによれば意志は、本論文で見たところとは別に、より一般的な意味では、魂の「能力と見なされ」うる。それは「欲求から生まれるあらゆる働きを含む能力」だとされる。このことは「知性が注意から生まれるあらゆる働きを含む能力」であるのに対応しているという (OP, t.I, p.414 ; 『動物論』第 X 章も参照のこと)。ただし、コンディヤックにおいては注意自体も欲求によって規定されるとされていた (本論文 I-1, III-1 参照)。『起源論』における欲求、注意、知性の関係をめぐっては、注 I (2) を参照のこと。また、『たわいなさの考古学』p.178, 訳注 5-26、『起源論』の古茂田訳上巻の訳注 26, 44 も参照のこと。

(9) 「驚き」には定義のようなものは与えられないが、「驚き」が出現する状況とその効果は次のように描写される。「立像〔人間〕が慣れていたある状態から、まだその観念を持ったことのない、全く異なるある状態へ突然移るとすれば、驚かざるをえないだろう。／(・・・)あるあり方から他

のあり方への移行が突然であるほど、その驚きは大きく、あり方に伴う快と苦 (peine) の対照に強く打たれる。〔このようにして〕よりよく感じられた快と苦によって引き起こされた注意は、連続するすべての感覚により活発に向けられる。(・・・) 驚きは魂のいろいろな働きの活動を増すのである」(I-II-17, 18)。驚きは、新しい状態への突然の移行を知覚することに伴う魂の一種の反応であり、魂の働きを活性化すると考えられていると言えよう。

(10) “*idées confuses*” という用語はライプニッツ哲学などにも現れる。デカルト的な「明晰で判明な (*claires et distinctes*)」観念 (表象、認識) に対立させて「あいまいで混雑した (*obscures et confuses*)」観念 (表象、認識) などと使われる。ライプニッツ哲学においてこの形容詞はしばしば「混雑した」と訳されるのでそれに従った。

(11) 理論の知識についてコンディヤックは同じ『感覚論』の別の箇所でも語っている。「理論の知識を得るためには、どうしても言語を持つ必要がある。なぜなら、諸観念を分類し、限定しなければならぬからであり、このことは方法立てて使われる記号を前提とするからである」(II-VIII-35, 最終部分)。なお、コンディヤックは 1754 年の初版刊行後に『感覚論』に加筆している。本文での引用箇所 (第四部導入部) と本注での引用箇所はどちらも『感覚論』の 1754 年版には欠けている部分である。

(12) デリダも前掲書で同じ一節を引用し (81-82 頁)、関連して、「私たちの行為を統御している混雑した観念、言語以前・記号以前の判断、そしてもの言わぬ分析といったものがどのように『私たちを行動させる』のかに、結局この理論的な力が着目することになる」(85 頁)、「理論的なものは、実践的なものに着目して、それを補うこと」(88 頁) であるとしている。

III. 欲求の理論の展開

(1) 『感覚論』における、注意、比較、判断、反省の定義等については注 II(2) で簡単にふれた。想像については、次節 III-2 でふれる。推論は『感覚論』では概念としての定義は特に与えられないが、『予備講義の概要』では、三段論法を典型とする判断の連鎖を意味するとされる。また、『予備講義の概要』における、意志、知性の定義については注 II(8) でふれた。

『予備講義の概要』で列挙されるような魂の働きのそれぞれが、『起源論』(1746 年〔初版、以下同じ〕)、『感覚論』(1754 年)、『予備講義の概要』(1775 年) という人間精神を扱ったコンディヤックの著作の中で、概念として確立されているか (定義を与えられているか)、されているとしてどのようにか、を検討することはコンディヤックの思想を理解するために有用であろう。また、1769 年に刊行された最初の『コンディヤック著作集 *Oeuvres de M. l'Abbé de Condillac*』以来『感覚論』に加えられようになったと思われる『感覚論摘要 *Extrait raisonné du Traité des sensations*』も検討の対象として上の 3 著作に追加することもできよう。しかし、こうした検討は、テーマとしても、また必要とされる紙幅の関係からも本論文の対象範囲を超えている。本論文では検討対象を欲求、欲望とそこから派生する感情に限定することとした。

(2) 不安については本論文 II-2, 4 を参照のこと。

(3) 欲望が<魂の諸能力の方向づけ>となっても、欲望には依然として強弱がある。「あるものが欠けていることで私たちが苦しめば苦しむほど、身体と魂の諸能力の方向づけは強まる」(OP, t.I, p.414 [『予備講義の概要』第 II 節、「欲望」の項]、なお、本論文 II-2 も参照のこと)。

なお、『感覚論摘要』(1769 年) では欲望は<諸能力の活動>とされ『感覚論』と変わらないが、後に『予備講義の概要』で定義が微妙に変化するのに伴って現れる « *déterminer* » (方向づける) と

いう言葉がすでに使われているのが興味を引く。「やがて記憶は私たちの幸福に寄与できると思われる対象を呼び覚まし、すると直ちに私たちのあらゆる能力の活動はその対象へと方向づけられる (se détermine vers)。諸能力のこの活動が私たちが欲望と呼ぶものである」(OP, t.I, p.327, [「第一部の概要」の中段])。後の『論理学』(1780年)では、欲望は<方向づけ>とされ、次のように語られる。「私たちの見たところ、欲望という言葉によっては、必要な [=その欲求を持っている (avoir besoin de)] 事物への私たちの諸能力の方向づけ (direction) しか意味することはできない。したがって、私たちが欲望を持つのはただ、満たさねばならない欲求を持っているからである。こうして、欲求と欲望が私たちのあらゆる探求の動因なのである。」(OP, t.II, p.393)

(4) デリダは『たわいなさの考古学』で、コンディヤックの欲求/欲望の概念の解釈を展開する。欲求は、一貫して「ものごとに対する私たち人間の関係のただ一つの原理」(前掲書 78頁)であり、「コンディヤックの体系の唯一の原理である」(129頁)。一方、欲望について語る際、デリダは本節で見た『予備講義の概要』などにおける欲求/欲望の定義に依拠する。デリダは語っている。「欲望はその力においては欲求にほかならないとしても、欲望の概念は欲求の概念から派生するとしても、この派生態はどんな力を加えも奪いもせず、欲求の方向を定めて欲求に様態を与えるだけだとしても、それでも欲求についての認識あるいは意識は、欲望を、方向づけられたこの派生態を、さらにはこの方向づけが向かう対象を、経由するのである」(128頁)。

(5) かつて『起源論』においても、「ものごとは、もっぱら(…)私たちの欲求との関係によって私たちの注意を引く」とされていた。注意については注I(4)、II(8)、II(9)、III(7)も参照のこと。

(6) 以下、本項(III-2)での引用は『感覚論』からのものであり、指示は従前の方式による。

(7) 「想像」は、『起源論』と『感覚論』では異なって定義される。『起源論』では、「想像」は<知覚そのものの再現>であり、それに対して「記憶」は<知覚を指示する記号の再現>であると考えられた(『起源論』I-II-II-25)。また、記憶が呼び起こす記号は意のままにしやすいので、人は記号を用いることで、それに結びついた観念をも意のままにできるようになる。つまり想像も意のままにできるようになる、とされる(I-II-IV-46)。他方、後の『予備講義の概要』では、想像は「注意」が持つ次の二つの働きを指すとされる。一方は『感覚論』で示された想像の働きであり、もう一方は、自然界では異なった対象に属する性質を精神の内で一つの対象に結合させる働きである。後者の働きによって、人はたとえば「100クデ〔約50メートル〕の人間」の観念を持つことができるとされる(OP, t.I, p.413)。

(8) 「不安」については、II-2, 4を参照のこと。

(9) コンディヤック『動物論』(1755)第二部「動物の諸能力の体系」第八章「人間の情念は動物の情念とどこが違うか」。古茂田宏による訳書(参考文献欄参照)の頁を付記する。

(10) デリダは、人間がこの「欲望することへの欲求」を抱くに至ることを、人間を活動に向かわせる動因である欲求/欲望にいわば「補足的な屈曲」が生じることだとしている。そしてこの「補足的屈曲」は、本論文でも見たように、人間が知性を有することを前提として生じる。つまり「人間の秩序とともに、言語活動、恣意的記号、交流一般とともに」生じるのである。以上、前掲書133頁参照。

(11) 人間の置かれたこの状態についてデリダは詩的な表現で語っている。人間において、「欲望はもはや対象への関係ではなく、欲求の対象である。もはや方向づけではなく、目的である。欲求を一種の飛翔へと向かわせる果てのない目的である」(前掲書134頁)。(なお、デリダは、欲望を人間の諸能力の対象への「方向づけ」、あるいは「対象への関係」とする『予備講義の概要』の考え方に

基づいて議論を組み立てている。注 III (4) を参照のこと。)

(12) 本論文では、主に『起源論』で扱われる記号についてはほとんどふれなかった。しかしデリダによれば、欲望としての魂の活動の中で、人間の認識作用に欠かせない記号も生み出されることになる。また、デリダによれば、こうした記号はしばしば指示対象から離れて「たわいない」ものとなる。この記号の出現と逸脱についてデリダは語っている。(なお、既に注意をうながしているように、デリダはコンディヤックにおける欲望を人間の諸能力の「方向づけ」と考えている。)「たわいなさは欲望によって欲求のもとに現れる、と考えることができる。欲望こそが対象にかかわる方向づけを開始し、補いの記号 (signe suppléant) を生み出す。ただし、この記号はいつも、不在、自由 (disponibilité)、拡張によって、いたずらに作動する可能性があるのである」(133 頁)。こうして、まず、「たわいなさは、向かうべき具体的対象が欠けた欲望、あるいは浮遊する欲望の反復である」(128 頁)。

ここで、「補い」とある点について補足しよう。デリダによれば、「記号はおしなべて計算的な本質を持ち、この計算の力は自らよりも古くからある力を、行為、情念、欲求に関して反復する。理論的なものは、実践的なものに着目し、補うことなのである」(87-88 頁)。デリダは、意識に先んじる行為や実践は私たちにとって一種の「欠落」であるとして次のように続ける。「欠落を補うものによって生み出された過剰という結果が、経済的、言語学的な交流を、また欲得ずくの取引や、おしゃべりのたわいなさを、引き起こす。二つの分野で類比的に、商品、貨幣、貨幣代わりのチップ、あるいは、観念、充実した記号、むなしい記号が生み出されることになる。欲求だけに基づいてはいても、このエコノミーは、それが無用な補い (supplément)、あるいは過剰を生み出す限りでしか機能できない (・・・) のである」(92 頁)。デリダによれば、結局、「欲求と過剰、有用と無用の一般理論」(91 頁) というべきものが存在するのである。

なお、デリダはさらに、「たわいなさは」は欲求と欲望のもう一つ別の関係にも当てはまると語る。すなわち、たわいなさは「また、それ自体のままの欲求、具体的対象が欠けた欲求、欲望の支配を受けない欲求でもある」(128 頁) とされる。「欲求自体がたわいない、ということもできる。欲望を欠くなら欲求はいかなる対象も持たず、それ自体から変化せず、それ自体だけで閉ざされており、トートロジックであり、石のようなままだからである」(133)。関係を持ち得ない欲求も無用で、たわいないのである。

参考文献

* ここでは本論文で利用したもの、本論文に直接関係するものに限定して掲げる。

邦語文献を中心により広い文献リストを次の拙論の末尾に掲げているので参照されたい。「デリダのコンディヤック読解——自同性の問題を中心に——」(名古屋大学大学院国際言語文化研究科『言語文化論集』第 XXX 巻第 2 号、2009 年 3 月)。

コンディヤックの著作

Condillac, *Oeuvres philosophiques*, Corpus général des philosophes français, éd. Geroges Le Roy, P.U.F., 1948, t.I-IV. (ルロワ編『コンディヤック哲学著作集』)

Condillac *Lettres inédits à Gabriel Cramer*, éd. Georges Le Roy, PUF, Paris, 1953

なお、コンディヤックの個々の著作については、次の論文中の注 2 を参照されたい。「デリダのコ

ンディヤック論——『たわいなさの考古学』解題——」（名古屋大学大学院国際言語文化研究科『言語文化論集』第XXVIII巻第1号、2006年）。また、邦語で読むことができる著作は最近1点加わって3点となった。

『人間知識起源論』 *Essai sur l'origine des connaissances humaines*, 1746（邦訳、コンディヤック『人間認識起源論』古茂田宏訳、岩波文庫、1994年、全二巻）

『感覚論』 *Traité des sensations*, 1754（邦訳、コンディヤック『感覚論』加藤周一、三宅徳嘉訳、創元社、1948年）

『動物論』 *Traité des animaux*, 1755（邦訳、コンディヤック『動物論』古茂田宏訳、法政大学出版局、2011年）

コンディヤックに関連する研究

Jacques Derrida, *L'Archéologie du frivole*, Galilée, 1990（邦訳、ジャック・デリダ『たわいなさの考古学——コンディヤックを読む』飯野和夫訳、人文書院、2006年7月、200頁〔本文135頁〕）。この著作ははじめ1973年に、コンディヤックの主要著作である『人間知識起源論』の校訂新版に付せられた序論としてガリレ（Galilée）社から刊行された。

Rodolphe Gasché, *Archéologie et frivolité*, in *L'Herne* 83, Éditions de l'Herne, 2004（邦訳、ロドルフ・ガシェ「始原学とたわいなさ」、『別冊環』第13号、飯野和夫訳、藤原書店、2007年）この論文は厳密にはデリダのコンディヤック論を論じている。

Jean Sgard (éd.), *Corpus Condillac*, Éditions Slatkine, Genève, 1981

飯野和夫「コンディヤック『人知起源論』に見る真理探求の方法論」、名古屋大学言語文化部『特定研究シリーズ5 誤解：その言語文化的諸相』、1995年

飯野和夫「デリダのコンディヤック論——『たわいなさの考古学』解題——」、名古屋大学大学院国際言語文化研究科『言語文化論集』第XXVIII巻第1号、2006年

飯野和夫「デリダのコンディヤック読解——自同性の問題を中心に——」、名古屋大学大学院国際言語文化研究科『言語文化論集』第XXX巻第2号、2009年